

大会講演

10回目の開催となった恒例の伊香保短歌大会は、2011年5月19日に伊香保温泉ホテル天坊にて、初参加の方々の姿も多く見られる中、行われました。

和倉温泉短歌大会は、7月28日、能登半島の拠点である和倉温泉観光会館にて、4回目の大会を開催しました。

NHK学園生涯学習フェスティバル

●伊香保短歌大会

と き／二〇一一年五月十九日（木）

と ころ／群馬県渋川市・伊香保温泉ホテル天坊

演 題 わかりやすくして深い歌

講 師 馬場あき子先生……3

●和倉温泉短歌大会

と き／二〇一一年七月二十八日（木）

と ころ／石川県七尾市・和倉温泉観光会館

演 題 河野裕子と私

講 師 永田和宏先生……15



「河野裕子と私」

永田和宏

長年、連れ添われた河野裕子さんが他界

されたのは平成二十二年の八月でした。豊かな感性でダイナミックに歌を詠まれていた河野さんは、戦後生まれの女流歌人の中でも、常に先頭を歩まれていました。今日は、河野さんが最期の瞬間まで詠まれていた歌についてお話しくださいます。

ご紹介いただきまして、ありがとうございます。今日は「河野裕子と私」ということでお話しさせていただきます。こういうテーマで話をするのがあまりないので、何をお話ししてもいいのでしょうかけれど、「河野裕子と私」ということで言いますと、私の気持ちというのは、私の歌の中にいちばん表れていると思っておりまして、本来このような席ではあまり話さないのですが、……後半は朗読をさせていた

だこうと思っています。

耳だけでお聞きいただいで、味わっていただくというか、私の気持ちを感じていただければ、と思っております。

息をするように歌を作っていた

まず、河野裕子の残した歌についてお話しさせていただきます。今の話にありましたように、彼女が最後まで歌を作っていたことで、どのように感じているかということをお話しします。一首目です。

何といふ顔してわれを見るものか
私
はこよ吊り橋ぢやない

これは河野に乳癌が見つかった時の歌です。前の日「ここにしこりがある」と私に見せに来まして、すぐに私の知っている先生に診ていただいた時の歌です。河野は病

院で病気を告げられていて、その前に私の

ほうには教授から「悪性の疑いかなり強い」という電話がありました。河野が病院からこちらにやって来る路上で出会っていました。私は病気を告げられて自分でも混乱していたのですが、「たいしたことはない」と思いたい。こちらが動揺していると、本人はもつと動揺するのは火を見るより明らかなので、どうってことないという顔をして、できるだけ平然としていたと思います。何食わぬ顔をして河野と出会ったんです。二、三言話して「疑いがあるのでもう少し精密検査をする必要があるから」と言って別れました。何食わぬ顔で、平然としていたつもりだったのですが、彼女にはお見通しだったのですね。「何といふ顔してわれを見るものか」と。「私はこよ吊り橋ぢやない」というのがすごい

すね。私はまったく悟られていないと思っ
ていたのですが、彼女にとって私はすごい
形相をしていたのでしよう。後年、彼女は
「この世のものを見る目つきではなかった」と、どこかに文章を書いています。こちら
もたいへん混乱していた時の歌で、私にと
ってこの一首は非常に辛い歌です。だいた
い、嘘をつくのが下手なんです。すぐ顔
に表れてしまう。私にとって非常に辛い歌
ですが、ここから河野の十年間の痛との闘
いが始まったという歌でもあります。

泣いてゐるひまはあらずも一首でも
書き得るかぎりは書き写しゆく

河野は自分の病気を知って、最初のうち
からということとはなかったように思うので
すが、特に転移がわかってからは悲しんで
いるよりも、歌を作り続ける、とにかく一
首でも多く書き残したいという意志が非常
に強かったようです。

ここに河野の「蟬声」という最終歌集が
あります。これは河野が亡くなってから出
た歌集です。この中の半分以上の歌は雑誌

などに発表した歌ではなく、河野が手帳に
書き残したものを我々が書き写したと言
いますか、読み解いて歌にした、そういうも
のです。入院している間も病院で、おそら
く消灯後でしようね、電気が消えて暗
い中、仰向いて書いていたのだと思います。
河野は、もともと読めないひどい字を書く
のですが、もつと読めなくて、しかも筆圧
が弱く鉛筆ですので、かすれたり字と字が
重なったり、飛んだり。読み解くのは非常
に難しいものでした。実は息子がやってい
る青磁社という出版社から出た本です。息
子がこの手帳をすべてコピーして、一週間
ぐらいかけて読み解いたようです。読み解
けないものを私と、やはり歌人である娘の
紅と三人で一字一字たどりながら、三晩ほ
ど夜中遅く、三時、四時ぐらいまでかけて
歌として読み解きました。この「蟬声」と
いう歌集は、身びいきではなく、非常にい
い歌集になったと思っています。

今日、私がお話したいことの一つは、
人間なぜそんなに歌を作り続けるのだろうか
かということ。体の自由がきかなくな
り、特に最後の一カ月ほどはまったく物が

食べられなくなり、持続点滴だけで栄養を
摂っているという状態でした。七月二十日
ぐらいから二十日間ほどで、二〇〇首近い
歌を手帳に残している。本当に、息をする
ようにして歌を作っていたように思いま
す。そこまで歌を書き続けるのは、一体な
んだらうと考えます。私自身はそれを子ど
もたちと一緒に読み解き、読んでいくプロ
セスでもとても敬虔な気持ちになってしま
した。河野自身も、もうそんなに長くないと
いうことを充分知っているわけで、その時
間を惜しむように手帳だけでなく、薬袋な
どにも書いていました。河野が亡くなって
から、空になっていたティッシュペーパー
の箱を潰して捨てようとしたら、潰したと
ころに字が書いてあったのです。慌てて見
ると、その箱の横にも裏にも、ほとんど見
えないような鉛筆の字で歌が書かれてい
て驚きました。なぜ人間は、そんなにしま
いで歌を作るのだろうかという、素朴な思
いがします。それはやはり、大事なこととい
う言い方は変ですが、やはり河野にとって
生きるこの意味だったのだろうと、そん
な気がしています。



歌を作り続けることの意味はなんだろうかと、ということ話をしてみたいのと、もう一つは私自身が今、苦い気持ちで思い出すことです。病気をしている河野と、どのように接したらいいかということについて、自分でも迷いがありましたし、今でもそれは解けていません。どんなふうに接したかということ、河野がどのように歌にしていたかということについて、少しお話ししたいと思います。

先ほど、病院で出会った時に平然としていたと思ったという話をしました。私自身は癌学会というところで仕事もしていました。医者ではありませんが、ある種、癌

の専門家の一人でもあります。そういう人間本人に癌が見つかった時はもつと辛いのもかもしれません、身内に癌が見つかった時というのも辛いものがあり、河野と同じレベルで嘆くことがなかなかできません。特に河野裕子というのは、ある意味ですべて自分の座標軸といえますか、ものを考えたり感じたりするところは、「私」からの座標でものを考えるという人でした。「私」の言うことが絶対というようなところがありました。ここで私が動揺しては、河野は多分耐えられないだろうという思いが非常に強かったですね。それで、この時点だけは自分は揺らいではいけないという、そういう気持ちで最初のうちは特に強かったです。ですから「なんてことはない。どうってことはない」と。もちろん、専門書も読んで勉強しましたが、いろいろなアドバイスもしましたが、基本は「どうってことはない」。特に、転移・再発が見つかるまではそういう態度でいました。それが、河野にとって非常に辛いことであつたというのが、後に作品からわかることになりました。

今ならばまつすぐに言ふ夫ならば底
つて欲しかった医学書閉ぢて

という歌があります。医学の本を読んで自分のことを心配してくれているのはわかるけれど、それよりももつと直接に泣いてほしかった、庇ってほしかった、あるいは触れてほしかったというのが、河野裕子の本音だつただろうと思っています。もつと端的に「私の夫は癌のことを読んではいけません、私の癌には直接触ってほしくない」というような、もつと直接的な歌もありました。これはすごく辛い歌なんです。自分としては、河野を動揺させないように平然と装っているのだけれど、河野にしてみればもつと自分に寄り添って、自分と同じレベルで嘆いてほしい。そのために、我が家では非常に辛い時期がありました。河野自身が精神的に不安定になり、激昂するし怒り出すし、家がめちゃくちゃになり、よく崩壊しなかつた、今でも思います。

後年、河野自身も「家に病人が出るということは、家に戦争が起こることだ」と書いていますが、まことにその通りで、いつ崩壊するかわからないような状態が三、四

年続きました。その大きな一つの原因は、河野の悲しみ、苦しさというものを、同じレベルで体験してやるのができなかったところにあったのかもしれないと思います。今でも自分で解決できていません。あれで良かったのだとも思いますし、もっと初めから一緒になって嘆き、動揺し、我を忘れてというほうが、河野には心強かったのかもしれないと思います。

一方で、永田和宏がここにおいて、「彼が大丈夫だと言っているのだから、自分は多分大丈夫なのだろう」と思っていたらというほうが、良かったのかもしれないと思います。そこところは、よくわかりません。ただ、二〇〇八年に転移・再発が見つかってからは、そういう余裕がまったくなくなりました。ひよっとしたら、それ以降は河野がしっかりして、私たちが動揺し、河野の前で泣いたことが何度もありましたし、すがったこともありました。結局、こちらのほうに余裕がなくなっていました。その時の歌が、

死なないでとわが膝に来てきみは泣き
くきみがその頸子供のやうに

というものです。あるいは、

今日夫は三度泣きたり死なないでと
三度泣き死なないでと言ひて学校へ
行けり

という歌があります。

みっともないことですけれど、もう虚勢を張っていられなくなって、河野の前で思わず泣き崩れてしまうようなことになりました。私自身は、再発・転移ということになって、河野がもつと動揺するかと思つたのですが、逆に転移が見つかったから、むしろ河野は非常に静かに自分のことを見つめ始めたように思います。多分、彼女はどこかで思い切つたのでしようが、それがいつ頃のことだったのか、よくわかりません。ただ一つ言えるのは、私のほうが潰れてしまつて、虚勢を張っていられなくなつた。そして、彼女に取りすがするような感じになつてしまつたことが、彼女はとても嬉しかったのだということ、やはり歌で思い知らされたという気がします。

今、申しましたように、子どもたちも巻き込んで地獄のような時期が過ぎました。河野は何もわかつていない、覚えていない

と思つていたのですが、次の歌を読んだ時には、はっとしたというか、救われた気がしました。

あの時の壊れたわたしを抱きしめて
あなたは泣いた泣くより無くて

という歌です。「壊れたわたし」というのは、河野が自分のことを言っているわけですが、もう自分でもどうしようもなくて、錯乱状態にある河野を抱いて泣いていた時期がありました。そのことをわかつていないと思つていた河野が、やはりわかつていたのです。それを知つた時に、やはり別れなくてよかつた、家を崩壊させてしまわなくてよかつたと心底思いました。この歌が



一首あることで、私自身は七、八年間の苦しかった時代が本当に報われた気がしました。私にとつて、非常に大事な一首です。

一番大事に思っていることを詠う

そんな時期のことを話していると時間がなくなってしまうので、もう一つのお話をします。最初に申しましたように、河野は最後まで歌を作り続けて、亡くなる前日まで歌を作っていました。なぜ、そんなに歌を作るのだろうか。何年も前に「私は、亡くなる日まで歌を作り続ける人だけを歌人といいたい」という発言をしたことがあります。文章にも書きましたし、このような場所でお話ししたこともあります。

面白いからと、歌という形式で自分を表現してすぐに去ってしまう。また、歌という表現形式を利用して名前を売り、別のジャンルに行ってしまう。そういう歌人も多いわけですが、有名であろうと無名であろうと、自分が死ぬまで歌を作り続けることがいちばん大事なのだという思いがします。歌というのは、ある時だけうまく自分

を表現できても、それだけでその人を「歌人」と呼ぶのは不十分な形式だと思っています。その人が歌を作り始めてからの時間をずーっと経ることで、その人の歌の中にその人の時間が刻まれている。これがとても大事なことだと思っている。死ぬ日まで歌を作る、そういう人こそ歌人と呼びたいと、思っているわけです。

自分の奥さんがそれを実践するとは、最初の頃、考えてもいませんでしたが、まことにその通りだったと思います。河野は歌のために歌を作っていたわけではありませんでした。そういう気がしません。プロの歌人といわれる人の中には、実生活と関係なく言葉のレトリックとか、面白い発想とか、そういうことだけで歌を作っている人も多い。もちろん、投稿歌の中にもそういう歌があります。でも、河野の歌は最も生活を大事にしていた。自分が生きているこの現場を大事にして、その中から歌を作っていた、そんな気がします。

例えば次の歌です。

をんなの人に生まれて来たことは良かったよ子供やあなたにミルク温める

「をんなの人に」という言い方はいかにも河野的です。

何年もかかちて死ぬのがきつといい
あなたのご飯と歌だけ作って

彼女は歌人であるという意識が非常に強い人だったと思います。「歌を作るしか、何もできない人間だから」とよく言っていたように、「歌を作って死ぬのだ」という意識が非常に強かったですね。でもそれは、歌のために歌を作っているのではなく、自分が今生きていることを表現するために、歌を作っていたのだと思います。ですから「きちんと生きる」ということをないがしろにしては、彼女の歌は成り立たなかった。自分がしっかり生きていることが、そのまま歌に反映してくる、そういう歌作りだったと思います。「をんなの人に生まれて来たことは良かったよ」の歌は、しばらく前のフェミニズムの時代でしたら最も攻撃をくらう歌です。実際、彼女は「陽にあてしふとんにくるみて寝かす合せ」という歌を作って総攻撃を受けたこともあります。でも、彼女は平気でそういう歌を作ってしまう。彼女にとっては社会的

な動きとか、縛りというのはあまり重要ではなく、自分がいちばん大事に思っていることをそのまま詠うことがいちばん大事でした。そういう歌作りでしたから、平気でそういう歌を作っていました。

「何年もかかって死ぬのがきつといい」は、ちょっと辛い歌で、彼女自身もそんなに何年も時間が残っているのではないことがよくわかっていたと思います。それでも、「やがて自分が死ぬまでにゆつくりと、何年もかかって死ぬのがきつといい。その間、私はあなたのご飯と歌だけを作って時間を送る」、そういう歌なので、私にとっては非常に切なく辛い歌です。しかし、ここにあるのは「ご飯を作ることが非常に大事だ」という、そういう歌だと思えます。

歌人として死にゆくよりもこの子らの母親であり君の妻として死ぬ

普通であればその通りなのですが、河野が言うからこの歌に迫力があるのです。河野について、誰もが明らかに歌人としてしか意識していない。河野に会うと「えっ、河野さん、ご飯を作りますか？」と言う人がたくさんいたそうです。ご飯などまっ

たく作らずに、歌だけを作っているのだらうと思っている人が多かったようですが、彼女にとつては、歌人として見られることよりも、実生活で自分の生活をきちんとして家族にご飯を食べさせるというのがいちばん大事だったということです。右の歌は、森鷗外がその墓に「森鷗外」と刻まずに、「森林太郎」とした。「文学博士」とか「軍医総監」などと刻まずに、「森林太郎墓」として作ったというのを、なんとなく思い起こさせます。

生きてゆくとことんまで生き抜いてそれから先は君に任せる

河野は、自分の生活をとことんまで大事にして生きた人でした。「とにかく自分は生き抜く。とことんまで生き抜く。歌を作ってご飯を食べさせて生き抜くけれど、それから先はあなたに任せよう」と、バトンを渡すんですね。これは、私たち家族にとつて非常に重いバトンで、渡されたバトンをどんなふうに継いでいくかということ、は、我々にとつてたいへん大きなことです。私自身、彼女の歌を自分たちが反芻することに残していくしかないんじゃない

か、と思っています。そのために、私は長生きする、長生きしなければ彼女が死んでしまうと思っています。

今まで、私は自分で飯を作ったことなど一度もありませんでした。でも、彼女が亡くなってから、まったく外食していません。みんなびっくりしますが、いつも自分でご飯を作っています。NHK教育テレビの「ETV特集」という番組でご覧いただいた方もいらつしやると思いますが、私がスーパーで買い物をして、ぬかみそを混ぜているところなどが出まして……ずいぶん好評だったようです(笑)。

最後に作った歌

長生きして欲しいと誰彼数へつつつ
ひにはあなたとひとり数を数ふ

「みんなに長生きしてほしいけれど、私がいちばん長生きしてほしいのはあなただけだ」と言われている歌です。これでは長生きしないわけにはいきません。

あなたらの気持ちがあんなにわかるのに言ひ残すことの何ぞ少なき

「私たち夫婦は、日常会話の中で「あなたが大事」とか「あなたがいなければだめだった」とか「愛してどうの……」ということはあまり言いませんでした。それは歌があつて、家族それぞれが歌を通じて思いを知っているという気持ちで非常に強かったからだと思います。やはり河野は、「言ひ残すことの何ぞ少なき」、どうしてこんなに少ないのだろうと言っていますが、でもその気持ちはわかっているのだというのが彼女の本音だっただろうと思います。

次の歌は、もう知っていただいている方が多いと思います。彼女が亡くなる前日に、最後に作った歌です。

手をのべてあなたとあなたに触れた
きに息が足りないこの世の息が

最後にこの歌を作ったということに、私は驚嘆します。この歌は本当にいい歌だと、残つていく歌だと、彼女の代表歌に間違いなくなる歌だと思えます。最後の一首が代表歌になるというのは、ちよつと信じられないことですが、これは、やはりいい歌だと思えます。この「あなたとあなた」がちよつとわからないのです。

先日、伊藤一彦さんが「手をのべて」「あなた」と言いながらあなたに触れたきにと、「あなた」と「あなた」は同じではないか、という意見を出されました。面白い解釈だと思います。

その場で馬場あき子さんが「それは違うんじゃない」とおっしゃつて、やはり「あなたにも、あなたにも触れたき」という意味ではないかと。これは解釈の分かれるところであります。いずれにしても、これは最後に私が口述筆記をした歌です。この歌を、私自身の手で書き残せただけでも、とてもありがたいことだった、と思つています。

耳で聞く「河野裕子と私」

最初にお話ししましたように、「河野裕子と私」というタイトルで、私の気持ちをいちばんストレートにわかっていただけるのは、私の歌と文章だと思えますので、これから朗読します。耳だけでお聞きいただきたいと思えます。三編のエッセイも入っています。そのうちの二編は私のエッセイ

集「もうすぐ夏至だ」に入っているもので、もう一つは『家族の歌』という、家族全員で書き継いだエッセイ集で、その中に入っているものです。その他の歌には、まだ発表されていないものが入っています。それでは読ませていただきます。

二〇〇〇年九月二十二日、妻に乳癌が見つかる。リンパ節に転移あり。十月十一日、京大病院にて左乳房を温存手術。

癌と腫瘍の違いからまず説明す何も隠さず楽観もせず

何にしてもあなたをおいて死ぬわけにはいかないと言うちりとりを持ちて
大泣きに泣きたるあとにまだ泣きつ
つ包丁を研ぎいたるかな

「私が死んだらあなたは風呂で溺死する」そうだろうきつと酒に溺れて
白梅はあちらこちらと見えながら病
後のひとの歩幅はかなし

二〇〇三年春、発病から二年。

白まばら紅まばらの梅林にふたりの
時の短きを言う

君よりもわれに不安の深きこと言う
べくもなく二年を越えぬ

平然と振る舞うほかはあらざるをそ
の平然をひとは悲しむ

ともに嘆くということをせぬわれを
悲しんでいる人は眠りぬ

あそこにも、ああ、あそこにもとゆ
びさして山の桜の残れるを言う

二〇一〇年六月。妻の河野裕子に乳癌の
転移が見つかったのが、一昨年七月。手
術後八年を経過して、ようやく家族みんな
が安心して始めたばかりのところだった。転
移・再発がどういう状況を意味するのかは、
癌に関わる研究をしていた私には、誰に言
われなくともよくわかる。

一日が過ぎれば一日減ってゆく君と
の時間 もうすぐ夏至だ

にわかには妻との時間が抜き差しならない
切実なものとして、心を占め始めた。一日

一日をできるだけ一緒に楽しく過ごしたい
と願う。しかし、楽しければ楽しいだけ、
そのことよって減っていく時間はいつそ
う切実に惜しまれるのである。

この家に君との時間はどのくらゐ残
つてゐるか梁よ答へよ 河野裕子

去年家を建て替えて、新しい家に住むこ
とになった。せっかくこれからの老後のた
めにと建てた家なのに、一緒に過ごせる時
間は「どのくらゐ残つてゐるか」。もとよ
り私の切実は彼女の切実でもあった。

あなたにもわれにも時間は等分に残
つてゐると疑はざりき 永田和宏

当然のことながら、私が先に死ぬことに
なっていた。老後の話は、私が先に行くこ
とで盛り上がるのが常だった。もとより、
「時間は等分に」と思っていたわけではな
かったが、しかし、まだあと十年くらいは
二人一緒に、老いていく時間を楽しむはず
だった。

すべての大切なものは、失って初めて身
に沁みてわかるものだ。夫婦として二人に
残された時間も然り。

家族とは何なのだろうと考えるとき、私
には、家族とは時間を共有するものの謂い
だという思いが強い。

連れ合いや家族という存在が自分にとつ
てなにより大切な切実な存在であるのは、
これまでに、ほかの誰のものでもない自分
たちだけの時間を共有してきたことによる
のだろう。

それを記憶とか思い出とかと呼び替えて
もいいが、記憶、思い出という言葉が、一
人の回想に比重のかかっているのに対し
て、時間の共有というのは、思い出すとい
う共同作業なのである。共犯あるいは立会
人として時間を領ちもつものである。一人
が「そろそろヤナギマツタケが出る季節
ね」と言えば、「東大路のプラタナスの並
木で袋いっぱい採ったよな」などと相槌を
打つ。事柄ではなく、あくまでディテール、
そのディテールのなかにこそ、共有する
時間はずっと立ち上がってくる。

そんなふうには共有してきた時間は、二人

で話題にしてこそ、意味がある。「半身を失ったような」という表現で伴侶を失う悲しみを言うことがあるが、それは、二人で共有した時間を強引に挽き取られてしまうことによるのだろう。確かに思い出すことのできる時間の記憶を、もはや誰とも共有することのできなくなる寂しさは、想像がつかない。

あの午後の椅子は静かに泣いていた
あなたであつたかわたしであつたか
きみがゐてわれがまだゐる大切なこ
の世の時間に降る夏の雨

あつというまに過ぎた時間と人は言
うそれより短いこれからの時間
あと五年あればとう君のつぶやきに
相槌を打ち打ち消して打つ

くやしいときみが言うときくやしいさ
はまたわれのもの霜月の雨
やどりぎは夕暮れ影を深くする幸せ
すぎたと泣く人がいる

とりあえずうなずいておくわたし
らい幸せな病人はいないと君が言う
とき

こんないい亭主はいないとわれは
言い本当だと思ふきみは笑うが

娘の紅が二十歳のとき、何かの雑誌のイ
ンタビューで、歌を作るということは、
「自分の時間に鐘をつける」、そういうこと
のような気がする、と言っていたことがあ
つて、うまいことを言う、と思つた記憶が
ある。

日常の時間は、のんびんだらりと流れず
ぎてゆく。しかしその日常のなかで歌を一
首作ることによつて、その時間だけは他と
は違つた時間としてくつきりと記憶に刻み
付けられることになる。わずか三十一字と
いう短い詩型だが、短いだけに余計に、感
情の核だけをくいつと掴んでしまうことが
できる。時間がスツと立ちあがる。何年か
経つて読み直してみると、その一首が作ら
れた場面が鮮明に浮かんでくるだけでな
く、感情の細やかな髪までなまなまと思ひ
出されるし、そのときの風のおいまでが
ありありと感じられることがあり、苦しい
くらいである。

たぶんそんな風にして、それぞれの時間

に鐘をつけながら、私は生きてきたのだろ
う。家族がそれぞれの時間を詠む。直接話
すのではないだけに、余計に本音が出るこ
とが多く、日常の生活とは違つた内面にふ
れてはつとすることも多い。

自分がこれまでに残してきた歌、妻の
歌、家族の歌は何にも換えがたい私の財産
であり、軌跡でもあると思つてきた。ここ
ろが癌が見つかり、またそれが再発してか
らの妻の歌はどれもが私には読むたびに悲
しい思いをするものになつてしまった。

大泣きをしてみるところへ帰りきて
あなたは黙つて背を撫でくるる

河野裕子

泣いている背を撫でる、ほんのわずかな
ことだつたはずだが、それが妻にはそんな
に切なく感じられていたことを歌で初めて
知る。

俺よりも先に死ぬなと言ひながら疲
れて眠れり靴下はいたまま

河野裕子

あの夜は、確かに泣いた記憶があったが、その後の記憶はない。眠ってしまったものらしい。「靴下はいたまま」が我ながら哀れだが、それは妻が自分の居なくなつた後の私を、視線の向こうに見ている哀れさでもある。

一日に何度も笑ふ笑ひ声と笑ひ顔を君に残すため

河野裕子

会ったころからよく笑う少女であった。結婚してからも、いまでもそれは続いている。彼女が居なくなつたら、きつと「笑ひ声と笑ひ顔」ばかりを思い出すことになるのだろう。こんな歌は反則だろうと思いつつも、私は泣いてしまう。最近の彼女の歌は、すでに「その後」への視線が強い傾斜を見せ、それが私を悲しくさせる。

歌を残せるのは、何ものにも換えがたい財産だと思つてきた。しかし、遺された連れ合いの歌を読むのは、また何ものにも換えがたい切なさとしみ以外のものではな

いことを知つて愕然とする。

歌は遣り歌に私は泣くだらういつか来る日のいつかを怖る

それらの悲しみの歌、二度と還らない二人の時間を痛切に思い知らされるこれらの歌を、ふたたび以前のように自分の財産だと思える日は来るのだろうか。

点滴を受けつつ眠りいる人の眠りの午後雨やわらかし

この桜あの日の桜どれもこれもきみと見しなり京都の桜
母のあらねばきみよりわれを知つて
いる人はあらずも死ぬと言えり
食べたくなくても食べよと言えりわがために食べてくれよと言いたきものを

原稿はもう引き受けないと約束すきみとの時間わずかな時間
ともに過ごす時間いくばくさはされどわが晩年にきみはあらずも

二〇一〇年八月十一日。いよいよ裕子の状態が悪い。昨日から吐き気が強く、持続的に皮膚から染み込ませていたモルヒネのバッチをはずした。

その影響だろうか、朝から苦しさに胸を掻きむしる。息苦しくてたまらないと言う。姿勢を変えてやる。それでも苦しさは変わらない。

汗をかき、「苦しい、どうにかして」から、「もう死なせて」に変わる。

酸素の細い管も鼻からはずしてくれと言う。寝巻きが苦しいというので、鉄で切り開く。

「苦しい」と声を出すたびに酸素消費が高まり、さらに呼吸が苦しくなる。手を握り、「だいじょうぶ、だいじょうぶ」と繰り返すだけの自分の無力を呪わずにはいられない。

「もうしゃべらないで。ゆっくり息を吸い込んで……」と、頭を撫でつづける。

一時は抜けてしまった髪も、ようやく、二センチほどに伸び、一本の白髪もないその黒々とした髪の毛は、撫でると、赤ん坊のように柔らかい。その柔らかさが哀れで

ある。

紅が突然アメリカでの生活のことを話し始めた。そうか、と、はっと思いあたり、すぐに私もそれに応じる。

淳と紅をそれぞれ三〇〇キロも離れたサマーキャンプに連れて行つたときのこと、その道中の楽しかったこと。

「裕子さん、覚えているかい？」と言葉を挟みつつ、二人で必死にアメリカ時代の思い出を次から次へと話す。話題は河野の苦しそうな顔を越えて、ゆつくりと展開し、やがてモルヒネのフラッシュが効き始めたのか、眠りに入ってしまった。

私たち家族の青春時代の、あの楽しい記憶に包まれて眠ってくれただろうか。

もうすぐ死のうとしている人。死の間際まで、あの楽しい時間の記憶が彼女の心を満たし続けてくれることを祈る。その記憶が私たち家族だったのだから。

一時間ほども眠ったあと、ベッドの両側から見つめている私たちに気付いたようだ。

不思議そうに眺めて、眩くようにゆつくり、かろうじて聞き取れるほどの小さな声

で話し始めた。

「あなたらの気持ちがこんなに……」。

あつ、と思う。

「ちょっと待って」と、すぐに原稿用紙を開く。歌なのである。

「こんなにわかるのに」と鉛筆を走らせる。しばらく時間があつて、「言い残すことの何ぞ少なき」。

あなたらの気持ちがこんなにわかるのに言い残すことの何ぞ少なき

一首できると、次々に芋づるのよう言葉が口へのぼってくるようだ。十分ほどの間に数首ができた。

最後の一首は、

手をのべてあなたとあなたに触れた
きに息が足りないこの世の息が

こんな風にして河野裕子は死の前日まで歌を作った。生まれながらの歌人だったのだと思う。

翌十二日。やはり苦しみの発作の直後

に、「われは忘れず」と呟いた。

「それから？」と促すと、

「うん、もうこれでいい」と言った。

それが、歌人・河野裕子の歌との別れであつた。

おはやうとわれらめざめてもう二度と目を開くなき君を囲めり

お母さん笑つてゐるよと紅が言ふ笑つておいでとまた髪を撫つ

たつたひとり君だけが抜けし秋の日のコスモスに射すこの世の光

飲もうかと言うのはいつも僕だった
飲もう飲もうと君が応じて

食べられぬ君の分までわれ食べては
しゃぎて飲んでさびしかりにき

「一緒よ」としずかに君は撫でくれき
「死ぬな」と泣きしあの夜の髪

「お父さんを頼みましたよ」わが髪を撫でつつ子らへ残せしことは

亡き妻などどうして言へやうての
ひらが覚えてゐるよきみのひら

あほやなあと笑ひのけぞりまた笑ふ
あなたの椅子にあなたがゐない

どうもありがとうございます。